
漁火屋台

久芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漁火屋台

【EZコード】

N8404K

【作者名】

久芳

【あらすじ】

大学一年の夏休み。進学のため地元から離れていた美和子は、彼氏の悠馬を連れて故郷の漁師町に帰つてくる。夏祭りの夜、海の向こうにぽつぽつと灯る漁火の中から、悠馬はひとつ不思議な屋台を見つけた……。

「海のむこうに、街があるみたいだ」

しみじみと呟いた悠馬の言葉に、あたしのお父さんがくわえ煙草でにやりと笑つた。

「よし、じゃあそこに飲みに行くか

「えつ、本当に街なんですか？」

期待をこめた声で話す悠馬に、あたしは笑いをかみ殺しながら違うと首をふつた。

はじめて漁火を見る人を、お父さんはいつも、こう言つてはからかうのだった。

海沿いの漁師町の、夏の夜の風物詩。

それはイカ釣り船の漁火が魅せる、夜の海に点々と浮かぶ小さな街の姿だった。

月明かりに照らされて浮かぶ深い藍の水平線に、ぽつり、ぽつりと光が灯り。それがどこまでも続いてまるで海の上に街があるかのように見せてくる。

なにもないはずの海に灯る明かりの正体は、イカを寄せるために照らす、漁船の漁火だった。

海のむこうでは漁師たちが汗を流しながら仕事をしているというのに、陸から見ればそれはまるで別世界のようだ。あたしは夏にあらわれるこの漁火の街を、海沿いの道からぼんやり眺めるのがとても好きだった。

昼間は暑くてだるくなってしまうけど、夜の海は涼しくてむしろ

すこし肌寒い。浜から吹くわざやかな潮風に、お父さんの煙草の煙が乗つてあたしの髪をさらつっていく。

小さな田舎町の、小さな夏祭り。花火を見終わって、海沿いの道を歩きながら家に帰るのが、毎年恒例のあたしの『夏』だった。花火だけじゃダメだし、海だけでもいけない。この漁火の街がないと、満足できない。

娘の彼氏に対する接し方のコツをよつやくつかんだお父さんが、悠馬相手にあれこれうんちくをならべ語りはじめている。懸命にそれにあわせながら先を歩く悠馬に、あたしとお母さんは顔を見合わせて笑つた。

「 美和子。お母さんたち、まっすぐ帰るけど？」

「 あしたたち、もうけよつとぶらぶらしてから帰るわ」

お母さんが、遅くなりすぎないようになると視線を送つてくる。あたしがそれにうなずきで返すと、お母さんはなにか言いたげながらも、熱弁をふるひお父さんの腕を引いて話をさえぎつてくれた。

お父さんも祭りのビールでだいぶ出来上がつているみたいで、よろめきながら歩くのを支えるふたりの姿はちょっとこぢやついてるよつにも見える。それがまたなんだか微笑ましてくて、あたしはにやつきながら見送り、ぼんやりと海を眺める悠馬の背を叩いた。

「お父さんと話すの、疲れるでしょ？」

「いや、漁火のこといろいろ教えてもらつて、面白かった。漁火つて、明るいところに寄つてくるイカの習性を利用してるんだな……」

悠馬もすっかり漁火の街に惚れ込んでしまつたようで、立ち止まつて海に釘付けになつてゐる。彼もまたアルゴールがはいつてるけど、お父さんほどじゃない。あたしはすこし考えてから、悠馬の手を引いてコンクリートの道を外れた。

防波堤の切れ間から、砂浜に降りる。今日の海は穏やかで、水面に落ちる月明かりがどこまでも続いている。ちょうど引き潮の時間のようで、ちよこちよこと岩が頭をだしているのが見えた。

「おー、すこ……」

夜の砂浜を歩くのははじめてのようで、悠馬はあたしに手を引かれたまま、スニーカーでしめつた砂を蹴っていた。瞳はあいかわらず海に魅せられたままで、あたしが見上げてもこっちなんて見てくれない。

山とビルに囲まれて育った悠馬にとって、海はやつぱり新鮮なんだと思う。

「すごいな。本当に、あそこには街がある」

その呆然とした咳きが、あたしはすこし不安だつた。

夜の海は綺麗。

でも、見つめすぎると呑まれてしまう。

生活の中に海がなかつた悠馬は、それを知らないようだつた。

「あのね、悠馬……」

「美和子、あれ」

悠馬が、ふいに海を指さした。

「あれ。漁火じゃ、ない」

「え……？」

その指先につられて、あたしも海を見た。

海の向こうに浮かぶ漁火の街。

その中で、たしかにひとつだけそれとは違つ灯りがあつた。

目を凝らせば、それは漁火の街よりも陸に近く、波の上に浮いているのがわかる。灯りも、他の船よりも強くない。さつきまでまったく気づかなかつたけど、悠馬に言われてようやくわかつた。

「あれ、なんだろう?」

「船じゃないよね?」

手をつないだまま、海へと近づく。足に波がかかって濡れそうになつて、岩にあがつてつま先で立つた。

手でひさしをつくつて、あたしはじつと、その灯りを見つめる。悠馬も眼鏡をくいとあげて、これでもかといつぶらじ首を伸ばして見つめていた。

「……屋台?」

「あたしも、そう思'う」

海の上に、ぽつりと、屋台が浮かんでいた。

一昨年。高校を卒業して、あたしは田舎の漁師町を出て大学に進学した。

去年。はじめの年の夏休みは、一人の生活にいっぶぱいいっぶぱいになつてホームシックになりながら実家に帰つて、久しぶりに会つたお父さんとお母さんの前で泣かないようにするので精一杯だつた。

今年。二年生の夏。あたしは彼氏を連れて、実家に帰つた。

お父さんもお母さんも、悠馬の存在にとにかく驚き戸惑つっていた。けれど、山育ちの彼に海を見せるため、と言つたらしふしふ納得してくれた。なにもあたしの帰省期間中ずっといるわけではなくて、悠馬がいるのははじめの一泊三日だけ。その後彼はいったん大学に戻り、用事をすませてから自分の実家に帰る。あたしも残りの日は地元でゆっくりする。お互いのサークルや講習の都合で帰るのがちょうどお盆のお祭り時期と重なつてしまつたというか、せっかくだからふたりでお祭りに行きたかったというか。

なにせひとり娘が初めてつれて帰つた彼氏だったので、あたしは両親に変な気をつかわせないようにするので必死だつた。

「……これ、どうなつてるんだろうな？」

そんなあたしの奮闘を知つてか知らずか、悠馬はのんびりとした口調で足もとを見下ろしている。手はずつとつないだままで、絶え間なく吹く潮風にお互い指先が冷えているけれど、あわせる手のひらはとてもあたたかった。

海の上に浮かんだ屋台に行くべく、あたしたちは海を渡つていた。不思議なことに、ふつうに海の上を歩いていた。屋台へ続く場所だけに、なにか見えない道のよつたなものがきていたのだ。足が海に沈むこともなく、波につま先が濡れることもなく、ただただ見えない道が、屋台へとまっすぐに続いていた。

海の上に、透明なプラスチックかビニールで、道をつくっているのかもしれない。そう結論づけて、あたしたちはひたすら海の上を歩いていた。

「でもどうして、海の上なんかにあるんだろうな？」
「新しいお店なのかなあ？　お母さんもなにも言つてなかつたけど

……

あの屋台も、この道も、非現実的だとこゝに、あたしも悠馬も気づいていた。なにかおかしい。怪しい。でも、氣になる。夏休みの海で起きている、この不思議な出来事に好奇心をかきたてられて、歩くことをどうしてもやめられなかつた。

「ま、海に落ちてもお互に泳げるしな」

「海とプールはぜんぜん違うんだよ。ここまで離れちゃつたら、泳ぐのもほんとうに大変だし」

あたしは言って、ふと陸を振り返る。こつの間にか、だいぶ離れてしまつていた。屋台があるのはほゞ冲じやないし、たどりついてもまだ陸が見えるところにあるんだろつけど。万が一海に落ちたら、足なんてぜつたい届かないところにいる。

この、波の下にある海の世界。真つ暗でなにも見えなくて、その中をたくさんの生き物が泳いでいる、空気のない世界。もし海に落ちて、この暗闇の海を泳いでる最中に、なにかが足に触れたとしたら。驚きよりも恐怖が勝るのだと想つ。

もし、落ちたら。海面を見下ろして、あたしの腕にぞつと鳥肌が
たつた。

嫌なことを考えてしまった。それをふりほどきたくて、悠馬の手
を強く握る。悠馬はそれがあたしの甘えだと思ったのか、目が合う
とにやりと笑ってキスをしてきた。

違ひ、と思つたけど、嫌ではない。ほんのリアルコールの残る唇を噛みながら、あたしは恐怖なんてすぐに消えて笑つてしまいそうになるのをぐつとこらえる。しつかりと手をつなぎながら歩き続けると、ようやく屋台が間近に迫ってきた。

あたしも悠馬も、船の上に屋台が乗つているものだと思つていた。けれどそこにある屋台は、船でもなんでもなかつた。

漂つてくる香りでわかる。これはおでん屋台だ。よくテレビドラマなんかに出でくる、夜の駅前で赤い暖簾を下げた、車輪で移動できるリヤカーみたいな屋台だつた。

海の上であるはずなのに、船に乗つていないとこ。屋台は沈むこともなく、車輪を水面の上にしつかりと立たせていた。波の動きに屋台を揺れさせながらも、沈む気配もまったくなく。暖簾の間から見え隠れする客用の椅子までもが、海の上に乗つていて。

不思議だつた。

その不思議さを、あたしたちはあいつと一緒に受け入れてしまつていった。

「 こりつしゃー」

屋台に近づくと、中から声が聞こえた。若い男性の声に、あたしと悠馬は顔を見合わせ、こくじとうなずいて暖簾をくぐつた。

「 ずいぶん、若い客がきたな」

ぐぐるなり、照明の明るさが田に染みた。外からだと暖簾に隠れてぼんやりはかない明かりだけど、屋台の狭い空間では、裸電球ひとつのがとも強く感じる。湯気がたちのぼつて、すこし蒸し暑かつた。

「あの、こりつしゃー……？」

「普通の屋台だよ。最近ぜんぜん客が来なくて閑古鳥が鳴いてたんだ。遠慮しないで座りな

屋台の店主は声のとおり若い男性で、もちろんあたしたちよりは年上だけど、まだ三十路には達してないようだつた。白いタオルをバンダナのように頭に巻き、目深すぎて目がほとんど見えない。すつと通つた鼻筋や薄い唇と、茶色く染めた髪だけはちゃんと見えた。一瞬、こわい人かなと思つた。けれどその屈託のない話しかたと、唇からのぞく八重歯に愛嬌があつて、それにすこしほつと安心してあたしは椅子に座つた。

悠馬はもう先に座つてしまつていた。そしてあたしが座つたのを見て、つないでいた手を離してしまう。それがちょっと心もとなくて、あたしは椅子を近づけて悠馬の隣にぴったり寄り添つた。

悠馬はすっかり、屋台に夢中になつてしまつっていた。そもそも発見したのは彼だし、行こうと言つたのも彼だつた。身体からわくわくと楽しそうな空氣がにじみ出でいて、屋台のお兄さんを興味深そうに見つめていた。

「なににする？」

「たまごがいいな

「酒は？」

「飲みます」

「……ちよつと、悠馬」

さくさくとすすんでいく話に、あたしは思わず彼の膝を叩く。力ウンターの上にお皿を出され、箸を置かれ、注文まで始まつていつの間にか飲むことにもなつてしまつている。

屋台に来たんだからそういうつもりではあつたけど。でも、なんだか軽率すぎる気がした。

「いいじゃん、おいしそうだろ？」

「そりゃ、そうだけど……」

田の前で湯気をあげるおでんの鍋に、あたしもかなり誘惑されている。四角い鍋は鉄板で仕切られていて、たまごやがんもや、はんぺんやちくわが行儀よくぐつぐつ煮込まれている。あたしはおでんなら大根が好きだった。

「おふたり、名前は？」

「悠馬です」

「美和子、です……」

つい、お兄さんの雰囲気にのまれてしまつ。コウマと//ココが、と呴くお兄さんは、長い菜箸であたしと悠馬のお皿に大根を取り分けてくれた。

「//ココ、酒は？」

「いえ、あたしは……」

悠馬はすでに日本酒をいただいて、嬉しそうに口をつけている。いちおうあたしたちはまだ十代なのだけど、大学のサークルなんだで、飲みにはすっかり慣れてしまつていた。

別にお兄さんに言わなければ未成年だつてばれないだろうし。どうせ今年で二十歳だし。悠馬は堂々と飲んでいるけれど、あたしはなんだかお酒を飲む気分になれなくて、お兄さんがくれたオレンジジュースをちびりと舌でなめた。

「じゃんじゃん食べてけよ。お代はいらないから！」

「えつ……」

「本当ですか？ やつた！」

それって怪しくないだろうか。あたしはそう思つのだけど、悠馬は違つらし。ぼったくられるのではとか、後々にかが起きるのではないかとあたしは警戒してしまうけど、表情が顔に出ていたのかお兄さんは八重歯を見せて笑つた。

「どうせ今日はもう客こないだろうしさ。材料あまつて捨てるのもつたないだろ？ 未成年に酒飲ませちゃつてる時点で、じつちも仕事じゃなくなつてるしな」

「あ……」

ばれていた。お兄さんの目には、大人ぶつてゐるあたしたちのこ

となんてお見通しだつたのだろう。

「だから、遠慮なく食べてけつて。//ココの好きな大根はいっぱいあるしや」

「……はい」

あいかわらず田から上隠れてしまつているけど、こやつと笑う
顔で、悪いものは感じられない。すこしの間ためらつたあと、あた
しひよすおずと箸を伸ばした。

見るからに味が染みていそうな茶色い大根は、箸でつつくとすぐ
にほりと崩れた。一口ぶんだけ切り分けて、口に運ぶ。鱗ではも
う、悠馬がひとつ完食していた。

「……おいしい」

「だろ?」

お兄さんと悠馬と、ふたりの声が重なる。ふたりそろつてにやに
や面白そうな表情を浮かべて、なんだかくやしいけれど、あたしは
食べることをやめられなかつた。

お母さんの味とも、コンビニの味とも違う、屋台の味。こんなに
おいしいおでん、今まで食べたことがない。

箸がとまらなくて、切り分ける一口も大きくなつて。あたしはあ
つといつ間にぺろりとたいらげてしまった。

「次は、たまごかい?」

「うん。染みてるやつがいい」

悠馬のリクエストで、今度はお皿にたまごを乗せてもらひ。すぐ
に箸をつきたてるかと思つていたら、彼はいつたん箸を置いて、お
もむろにジーンズのポケットからケータイを取り出した。

「彩ちゃんに?」

「うん、そう」

ぱしゃり、ヒケータイが鳴る。たまごの[アメ]をとり、いそいそと
メールを打ち始めた悠馬には、地元の高校に通つたつ年下の可憐
い妹がいた。

彩ちゃんには、あたしも会つたことがある。おしゃべり好きで、
悠馬と同じ一重まぶたの、可愛らしい子だつた。よく彩ちゃんから
何気ない日常をおさめた写真つきのメールが届くので、悠馬もこいつ
してたまにメールを送るのだった。

セツヒ、『』の「おでんつまごや」という、簡潔な文章を書くのだと思ひ。悠馬のせんな様子を、お兄さんはものめずらしげに見ていた。

「……おし、送った」

言ひて、悠馬はケータイをポケットにしまひ。そしてあらためて「いただきまし」と手をあわせて、たまごに箸をいた。

「やつぱ、つまごわ」

一口食べぐなつ、ほんとうに嬉しそうに、黒縁眼鏡の奥の目を細める。一度食べるととまらないようで、息つく間もなくあつという間に食べ終えてしまひ。次のはんべんをもうひとつ、それもまたほんの三口で皿の中におかめた。

「ハコも食べよう」

「食べてみるよ」

あたしだつて食べてこる。ただ、悠馬のペースについていけないだけ。たまごは黄身がほくほくでおいしいし、味もよく染みている。濃すぎず薄すぎない味付けは飽きないし、喉を潤すオレンジジュースもまた新鮮でおいしかった。

それぞれ違うものを食べていると、悠馬が「それ、なに?」と訊いてくる。あたしがこんなにやくの最後の一囗食べさせると、見かねたお兄さんが同じものを悠馬に取り分けた。

「遠慮しないで食べよ。腹いつぱいになつて帰つてくれな」

そう言ひて、お兄さんはあたしたちの皿を空にしない。そんなにお腹がすいていたわけでもないのに次から次へとたくさん口に運べて、酔いのまわった悠馬とお兄さんの会話を聞いているのがとても面白かった。

はじめの警戒心は、いつしか薄れつつあった。

「でもほんと、この屋台、不思議ですよね……」

あたしがしみじみ呟くと、お兄さんが「だろ?」と笑つた。

「なんで、海の上に浮いてるんでしょう? 海の上も歩けたし、なんか板みたいな浮かべてるんですか?」

「それは企業秘密だから言えないんだな」

笑つて流しながら、お兄さんがジューースのおかわりをくれる。悠馬の顔はすっかり赤くなつて、目もとろんとしはじめた。あたしの肩におでこをのせて、じゅれついてくる。

「こんなところのお店があるなんて、あたしそんせん知りませんでした」

「そんなに宣伝とかしてないからな。道行く人が見つけてくれるだけいいんだよ」

「でも、こんなにおいしいのにもつたいない……」

「ミワコがそう思ってくれるだけで十分だ」

ほんのり頬を染めて、お兄さんが言う。照れ隠しか、お目にしらたきを乗せてくれた。

「夜の海って、あたし、なんか怖いイメージがあつたんです。遠くから漁火を見るのはとても好きなんんですけど、近くに行くと暗くてなんか、呑み込まれそうで」

「だから美和子、さつきすこしためらつてたのか？」

顔をあげた悠馬は、よつやく気づいたようで、目を軽く見開いていた。でもその目も赤くなつていて、だいぶ眠いであつたことが伝わつてくる。

「俺は海、好きだぞ？ 地球の半分以上は海なんだ。地球は青いんだぞ？」

だいぶ呂律もまわらなくなつていて。けれど彼は話すのをやめず、あたしの肩を抱いてははと大きな声で笑つた。

「俺、海に憧れてたんだ。ずっと山ばっかり見てたからせ、海のあるところに住んでた美和子がすこしうらやましかつたんだよな」

「そんなに？」

「海は綺麗だし、魚はおいしいし。晴れた海なんてさ、太陽の光が反射してきらきら輝いてるんだぞ？ 夕陽が沈むときは海まで真つ赤に染まるんだ。海の中には魚が泳いで、海草がゆらゆら揺れてて、イソギンチャクが触手をにゅるにゅる出しててさ。俺、将来絶対ダビングやりたいんだよな」

一息でそう熱く語る悠馬に、あたしとお兄さんはそろって笑った。海が身近にあるあたしたちにとって、海を見て受けける感動なんてかがしれている。むしろ潮風に肌や髪が傷んで、車も錆びやすくなることのほうが心配で。嵐がきたら高波が危なくて、地震があれば津波の危険がある、やつかいな一面のほうが身に染みていた。

「夜の海とか、すごい綺麗なんだな。月の光がさ、海から浜辺までずっと広がってるんだよ。そんなの俺テレビとか写真でしか見たことがなかつたのに、今日は漁火まで見れたし！」

最高じゃん！ 悠馬が叫ぶ。上機嫌に身体を揺らして、絡まれたあたしは苦笑を隠せなかつた。

「でもね、悠馬。夜の海は、けつこう危ないんだよ？」

昼間の青く輝く海と、夜の深い闇を溶かした海は違う。夜に海面をじつと見つめていると、海に呑みこまれてしまつとあたしは小さいころからお父さんに言わっていた。だから夜の海は、けつして深くまで近づこうとせず、一定の距離をおいて眺めるのが一番だと思っていた。もちろん、今もそう思つてゐる。

「夜の海も、近づきかたを知れば、こわくないわ」

お兄さんは、ただそつと笑うだけだった。

最後の最後でぼつたぐられるかと思つていたのに。本当に代替はただだつた。

来た道と同じように、海の上を渡つて、浜に戻つた。帰り道ではもう、なんで海の上を歩けるんだらうとか、そういうことはほとんど気になくなつていた。

「悠馬、大丈夫？」

「へーき、へーき」

足取りのよぼつかない悠馬は、あたしとつないだ手をぶんぶんとふつて、まるで子供みたいに歌までうたつて歩いていた。

「うまかったな、おでん」

「そうだね」

「花火も綺麗だつたし、漁火も綺麗だつたし。俺、来てよかつたわ」「ほんと?」

砂浜からあがつて、もとの道路に戻る。海沿いの道は民家が軒々と続いているから、悠馬の歌声が近所迷惑になるのではないかとあたしはちょっと心配だった。

海から離れて、遠くから眺めると。屋台の中では存在をすっかり忘れていた漁火が、沖で再びきらめいていた。

遠目に見ると、屋台がまたまぎれてしまつてよくわからなくなる。屋台とお兄さんがどうやって浜に戻るのか、ちょっとと考えてみたけどやっぱりよくわからなかつた。

「悠馬、明日ちゃんと帰れる?」
「だいじょーぶ」「だいじょーぶ」

悠馬は今晚一泊して、明日になつたらバスで大学に戻る予定である。バスの時間は早朝の一便目だから、これから寝てもほとんど時間がないはずで、これだけ酔つている悠馬がちゃんと復活できるのか不安になる。

「もし無理だつたら、バスの時間遅くして寝てつてもうちは大丈夫だからね?」

「いや、でも、美和子のお父さんが落ち着かないだろ」

さすが悠馬、酔つっていてもあのぎこちない空氣だけは覚えているらしい。彼は人当たりがいいからさつとお父さんの懷に入り込んでなじんだけど、それでも彼女の実家に来るといつことだけでそういう神経をつかつたと思う。

自然と、つなぐ手に力がこもる。悠馬を見上げて目が合つと、お互い笑みがこぼれる。海にばっかり気をとられていた彼が、よつやくあたしのもとに戻つてきたような気がした。

ああ、よかつた。そう安堵の息をつこうとして、あたしの胃が急に痙攣した。

「うつ

つないだ手を離して、とつさに両手で口を覆つ。それでも喉もとをこみあげてくるなにかはおそれなくて、たまらずあたしは道端に逃げこんだ。

「……美和子？」

胃が暴れでもしているかのように、ひどい吐き気がする。身体がなにかを必死に吐き出そうとしているようで、じらえようとしてもえづくだけであつたく意味がない。

喉をせりあがつてくる酸味に負け、あたしは草むらに嘔吐した。げほ、げほ、と時おり咳き込んで、食べたもの飲んだものを次から次へと吐いていく。その苦しさに涙まで出てきて、嗚咽のような声を漏らすあたしの背中を、悠馬がそつとさすつてくれた。

「大丈夫か？ めずらしいな美和子が」

あたしはお酒に酔つても、吐いたことがなかつた。むしろいつもこうして吐くのは悠馬のほうで、介抱するのあたしの役目だつたはずなのに。

ましてや今日は、お酒もほとんど飲んでいない。屋台にいる間に波に揺られて、船酔いのような感じになつていていたのかもしれない。吐き気にくわえて頭痛までてきて、あたしは落ち着くのにしばらく時間がかかつた。

その間ずっと背中をさすつて声をかけてくれた悠馬は、だいぶ酔いがさめてしまつたようだ。胃から吐くものがなくなつたのを確認すると、あたしを軽々と背中に乗せて家までの帰り道を歩いてくれた。

悠馬の広い背中から、あたしはぼんやりと海を眺める。漁火のつくりだす海の街は、まだまだ消えることなく輝き続けていた。

漁火は好き。

でも、夜の海はこわい。

ずっと見ているとまた具合が悪くなりそうで、あたしは悠馬の背中に額をうづめた。

「 美和子、いい加減起きなさい」

お母さんに部屋のカーテンを勢いよく開けられて、あたしはまぶたをさす太陽の光に思わず顔を覆つた。

「一日酔いになるまで飲むんじゃないの」

「……そもそもあたし飲んでないもん」

まだかすかに痛みの残る頭をおさえて、あたしは布団から出る。枕もとの日覚まし時計を見ると、もう十一時をまわっていた。

昨日、お風呂に入らず服のまま寝たから、身体に潮の香りが残つてしまつていて。それにまた具合が悪くなりそうで、あたしはすぐにTシャツを脱いだ。

「 悠馬、は……？」

「 ちゃんとお父さんが駅まで送つてつたから。あとでちやんと連絡いれときなさいよ」

結局昨晩、あたしは悠馬に背負われたまま家に帰つて、意識をなくすよつぱたりと眠つてしまつた。昏々と眠り続けた間に、何度も悠馬や親と話した記憶もあるのだけど、夢と現実がまざつてしまつてどれが本当のことなのかさっぱりわからない。

悠馬の見送りはできなかつた。布団から動けないあたしのかわりに、お父さんが悠馬を駅まで送つてくれた。いや、いちおう動こうとは思つたのだけど、よほどあたしがひどい様子だったのか悠馬から『寝てなさい』と言わされたから甘えたわけでもあつて。彼もかなり飲んでいたはずだから、ちゃんと見送つて一日酔いになつていなか確認したかったのに。

「 今日は高校に顔出しに行くんじゃないの？」

「 うん……行くよ

この身体の鈍さは、昨日の体調不良の余韻なのか、それともただの寝すぎなのか。ギシギシときしむ身体を動かして服を脱ぎ、あたしはひとまずシャワーを浴びることにした。

久しぶりの里帰り。毎日家でぐうたらするかと思いきや、けつこう予定がはいつている。今日は母校に行つて担任だった先生のところに顔を出す約束をしているし、地元の友達から遊びようと誘いのメールがいくつも入つている。お母さんたちとしては娘を家においておきたいようだけど、あたしだつて久しぶりに友達に会いたかった。半裸の状態で家中をうろついて、行儀が悪いとお母さんに怒られる。バスタオルを肩にかけてお風呂場に行き、痛む頭をふらつかせながら下着を脱ぎ、こざ浴室にはこうとして、あたしは足をとめた。

「……？」

なにかが、背中に触れた気がした。

ぞろりと、冷たい感触。それは肩にかけたタオルの感触では、決して、ない。

なにか、指のようなものが肌を伝つたような。体温とは違つ生あたたかさが、肩甲骨のあたりにかすかに残つている。

後ろには、誰もいない。いるわけが、ない。

「お母さん、先生から連絡きたら言ってね！」

あたしは決して後ろを振り返るまいと浴室にどびこみ、蛇口をひねつて冷たいシャワーを頭から浴びた。

「何よ美和子、彼氏来てたんなら教えてくれてもいいじゃない！」

久しぶりに会った友達は、学生時代の面影も薄くなり、眉を綺麗にととのえて髪にはパー・マまでかかっていた。

「だつて、あつちも忙しかつたし。下手と一緒にいのうじう見られてみんなになんか言われるの嫌だつたんだもん」

「まあ、たしかにね。こんな田舎だとさ、ちょっと男の子と歩いつるだけで彼氏かとか結婚はいつだとか言われるしね」

千由紀の家に遊びに行くのは、高校を卒業して以来だつた。漁師の娘の彼女は、ちょうど夏祭りのときに悠馬と歩いた、海沿いの道のところに家がある。高校を卒業後、そのまま地元の漁業協同組合に就職して、最近ようやく仕事にもなれて余裕ができてきたようだつた。

「千由紀は、彼氏とかいないの？」

「いないよー。いつも漁師のおじちゃんたちにこいつにこじられてるけど、そこらへんはさっぱりだね」

千由紀の部屋で、ふたりでベッドを背もたれにして座り、テレビを見ながらあれこれ喋る。高校時代は毎日のようにしていたことなのに、地元を出ると当たり前だけができるわけがなくて。お互い高校時代に戻つたような気がして、担任の先生やほかの教科の先生の思い出話に華が咲いていた。

「ゆうまくん、だつけ？ 彼氏はいつあつちの実家に戻るの？」

「たしか、今日戻るはずなんだけじね。忙しいやつだからさ、メー

ルしても全然返事くれないのさ」

悠馬からきた最後のメールは、あたしが寝込んでいたときにお父さんに送られて、バス待ちのときに送信したらしきものだった。『体調、大丈夫か？ ゆっくり休めよ』とまた文面が本当にぶつかりぽつで、そのあとあたしが返事を送つても、いつも返つてこないまま一週間がたとうとしている。

悠馬は悠馬で大学のサークルやらボランティアやらに所属しているから、忙しいのはわかってる。付き合つてゐるくせに、頻繁にメールをくれるわけでもなく、すつぽかされることのほうが多いぐらいで。だからこそ夏休みぐらい、そこにはふたりでゆっくりしようと約束して一緒にあたしの地元に帰つたんだけど。

一週間も音沙汰ないのは、なんだか不安になる。

「ゆうまくん、都会の人？ こっちの田舎っぷりにびっくりしてたんじゃない？」

「いや、悠馬も地方の子だよ。ただ、山ばっかりのところに住んでたから、こっち来て海見てやたら感動してたもん」

悠馬の地元とあたしの地元を比べれば、あたしのほうが断然田舎だった。コンビニや生協はほかの町と共通してるけど、メジャーなスーパーやレンタルビデオショップはまず、ない。信号機も町内に三つしかないし、カラオケも一時間でけつこうつな金額になる。進学当初それを大学の友達に話したら唖然とされたので、あたしはなるべく自分から地元の話をしないようにしていた。

地元を出て苦労したのは、環境の違いだったと思う。なにせこちらはバスが一時間に一本出るかどうか。車がないとそつとうき労するし、休日になつたら日用品を安く買つために隣町まででかけたりもする。だからあたしは高校にいる間に免許をとつたけど、都会にでると車がなくてもぜんぜんやつていけた。

都会の人ごみや生活に疲れて、地元に帰りたくなつて。泣いていたあたしにそつと声をかけてくれたのは、他でもない悠馬だった。

彼も彼で、入学当初はやっぱり環境の違いに戸惑っていたようだ。

弱っていたあたしが落ち着くまで、いつもそつとそばにいてくれた。たぶん彼も寂しくて、あたしも頼れる人を必要としていたから、ちよつとお互に寄り添うようなかたちになっていたんだと思う。

そういうじでいるうちに、あたしもどうにか生活になれ。自分は都会のきらびやかなお嬢様たちについていけないと完全に悟ったころ、あたしと同じく疲れを見せ始めたほかの地方組の子達と仲良くなり。

そして悠馬と付き合うことになった。

「私もお金ためて、仕事探しにそっち出ようかな……」

あたしがそういうしていいる間も、地元ではちゃんと、同じぶんだけ時間が流れていた。高校時代にあれだけつるんでいた千由紀と離れても、彼女の時間が止まるわけじゃなくて。千由紀には千由紀の生活があつて、卒業して数ヶ月こそまめに連絡をとつていたけど、最近では誕生日にメールを送るぐらいの仲でしかなかつた。

それぐらい、お互に自分の生活にいっぱいいっぱいでなつていた。

久しぶりに再会するまでの間に、千由紀も仕事でいろいろあつたらしい。高卒で地元に就職するのはめずらしくないけれど、やつぱり世間の荒波は辛かつたようで。ふつくらとした頬は細くなつたし、化粧を覚えたのだつときつとおしゃれのためだけじゃない。煙草まで吸うようになつたらしく、けれどあたしの前では氣をつかつて吸おうとなかつた。

「……そういえば悠馬、漁火見てすげに感動してたんだよ

「イカ釣りの？」

前はテーブルの上にならぶのはジュースとお菓子ばかりだったのに。今は飲み物が缶チューハイに変わつていて。千由紀はビールも飲めるらしいけど、あたしはまだ苦くてダメだつた。

「やっぱり、山育ちには海つてなんでもめずらしいんだろうね。言ってくれたら、私のお父さんに頼んでイカ釣りの船に乗せてあげたのに

それにあははと笑つて、あたしはふとあの屋台を思い出した。

地元に残っている千由紀なんだから、海の上に浮かぶおでん屋台の存在も知っているに違いない。訊いてみよつかと思い、でもなぜか、あたしはその話題を唇に乗せることができなかつた。

屋台の記憶を、消そうとしている自分がいる。あれだけ悠馬と楽しく過ごしたのに、それを忘れようとしてしまう。いや、楽しみを自分のものだけにして、鍵をかけてしまいたいのかもしれない。

あの屋台は、不思議すぎた。

「……美和子？」

ふと黙り込んだあたしの顔を、千由紀がのぞきこんでくる。酔つた？ と訊かれて、あたしはうつうんと首をふつた。

「千由紀、最近仕事、どう？」

「まあ、ぼちぼちかな。相変わらず上司はセクハラしてくるし、先輩はすつごくむかつくよ」

それに対する仕返しの武勇伝を語りながら、千由紀が笑う。その笑顔だけは前と変わらなくて、あたしはほつとした。

「仕事、事務だっけ？」

「そう、金融課だから窓口ばっかりだけど。一緒に入った男子は、水産課で魚運んだりなんだりで毎日肉体労働だけどね」

酔いがまわつたようでとろんとまぶたをとろけはじめた千由紀が、身体を横たえてあたしの膝に頭を乗せてくる。控えめだった彼女がいつの間に膝枕なんていうスキルを身につけたのか、驚きながらもあたしはその頭を撫でた。

このまま眠つてしまふのかなと思つぐら、千由紀はしばらくな間、動きも喋りもしなかつた。

「……私さ、いま、彼氏がいるのね」

「そうなの？ おめでとう」

「彼氏っていうか、まあまだ微妙なんだけどさ。年上で、漁師でね。いつも船に乗つてることのほうが多いんだ」

だから普段は、あまり会えないらしい。連絡先はわかるけど、彼

の下船の時間と千由紀の生活時間が合わないようで、月に一度会えるか会えないかでなかなかすれ違いが多いようだった。

「いつだろう……最近っていうほどでもないんだけどね。沖の漁で事故があつて、彼と同じぐらいの年の人たちがさ、船から落ちて行

方不明になつちゃったんだよね。漁組にいるとそういう情報ってやっぱり頻繁に入るから、なんかたまにすごく不安になつちゃうんだ」

「まだ、見つかってないの？」

「見つかった人もいるんだけどさ。こちらへんの町の人じゃないから名前とかわからんないけど、もう捜索もしなくなってきたみたいだし……」

知らなかつた。やっぱり親は、娘が帰つてきても地元の人の情報しか教えてくれない。千由紀のふんわりとカールした髪を指でいじりながら、あたしはぼんやりと相槌をうつた。

「美和子……」

千由紀はあたしの膝の上で寝返りをうつたかと思うと、太ももに顔をうずめて、その細い肩をふるわせはじめた。

「いつか、さ。彼もそういうふうに、海に落ちて帰つてこなかつたらどうしようつて思うと、すげえわかるるの」

「千由紀……」

「私、お父さんが漁に行く時だって、不安になつたりすることがある。それこそ事故の話聞いたりするとよけいに心配になつてね。今回も彼が船に乗るとき、行かないでって、言つちゃいそつたの」

でも、千由紀は言わなかつた。

漁師は自然を相手に仕事をしている。大学に通うあたしとはまざ、違う。陸の上で働く千由紀とも、違う。

海があれば、どこででも働ける。

けれどいつも、海の危険と隣り合わせで働いている。

あたしの家は漁師じゃなくただの公務員だから、お父さんの仕事内容に不安を感じることはまったくなかつた。けれど千由紀のように、海で働く家族がいると、やっぱりいつもどこか不安なんだと思う。晴れ渡つて広げた海はとても穏やかだけど、時化た海は本当に危ない。あの高波の中操業する漁船が、いつひっくりかえつてしまふかと、見ていて不安になる。

あの海に落ちたら、人なんてほんとうにちっぽけだ。

海水浴ができる、足がついて遊べる浜辺なんて実はとても少ない。ダイビングで潜れる綺麗な海も、ほんとうに数えるぐらいいしかない。海は綺麗で、豊かで、そしてこわい。

しつかり深みに落ちてしまつたら、まず足はつかない。それで頭が混乱しているうちに、波が来て海底に身体をおしこまれる。息をつく暇なんてほとんどなくて、どうにか身体を浮かせよつとするだけで精一杯。

あたしは子供のころ、海で溺れたことがある。だから、よくわかる。

そのときはまだ浅瀬に近いといつたし、『気づいたお父さんがすぐに助けてくれたので命に関わるような大事にはならなかつた。トラウマになるほどでもなくて、別に今はふつうに、プールでも海で泳ぐこともできる。

ただたまに、考えてぞつとすることがある。

もし、海で溺れたら。

そのまま死んでしまつたら。

そうしたら自分の身体は、海の底に沈んでしまう。

救助が来て、身体を早く発見されればまだいいまつだ。

でも、もし、発見されなかつたら。

あたしの身体はずつと海の底に転がっているわけで。潮の流れにもみくちゃにされて、海底の岩に身体をつけたときに傷だらけになつていくわけで。

そして海に住む、貝や魚のえさになるわけで。

手や足の指先は、真つ先に腐つてそこから食べられていく。でもきっと、身体の中で一番やわらかいのは目玉で。はやいうちにあたしの眼球はなくなつて、そのうち眼窩を魚が行き来するようになるんだと思つ。

お腹の皮も食い破られて、内臓を引き出されて。衣服もぼろぼろになつて、あちこち骨がむき出しになつて。きっと海水を吸つた顔はむくんで面影なんて全然わからなくなつてしまつて、身体のあちこちに貝やイソギンチャクがはりついて侵食されていくに違ひない。そしてそのまま、海の一部になつていくしか、ない。

けれどもし、その状態でも誰かに発見されたとしたら。

漁船がごくまれに、海で亡くなつた人の遺体を水揚げすることがある。それは不吉なことではなく、漁師の間では幸運なことだといわれている。

けれどその遺体は、きっと腐敗して今にも崩れそうになつていてるわけで。腕をつかんだだけでもげてしまふかもしれない。むしろ、腕がなくなつている可能性だつてある。

そんな状態で発見された自分。

でも家族は、その姿がどんなに無残であつとも、遺体が見つかったことを喜ぶに違ひなかつた。

「……千由紀？」

涙がとまらないようで、千由紀の涙があたしのジーンズを濡らしていく。そういう溜め込んでいたのが見て取れて、泣かせてあげようと思い、あたしはただ頭を撫で続けた。

千由紀は「わいんだ。もし、彼がそうなってしまったときの」と話を考えた。「

悠馬は、海の楽しいことばかりしか知らない。

でもあたしたちは、こわいことも知っている。

だから、あの屋台に行くのがとてもこわかった。もし道が崩れて落ちてしまつたら、あの暗い海に呑みこまれてしまつたから。

落ちなくても、ただ見つめるだけでも。夜の海には、引き込む力がある。だからせつと、浜辺から、ぼんやりとながめるぐらいたがうどいい。

「だいじょうぶ、千由紀。」わくないよ

ながば自分に言い聞かせるかのように、あたしはずつと、千由紀の頭を撫で続けた。

千由紀が落ち着くまでそばにいると、帰る時間がすっかり遅くなつてしまつた。

泊まつてもいいよと彼女は言つてくれたのだけど、翌朝から家族で買い物に行く約束をしている。すっぽかしたら絶対怒られるし、なによりそれを楽しみにしている両親に申し訳なかつた。

だからあたしは、深夜の海沿いの道を、ひとりで歩いていた。

いちおう外灯はあるけれど、蛾の飛び交う電球は今にも消えてしまいそうなぐらい点滅しているのがほとんどで。夏の時期の漁師の家はみんな早くに寝てしまうから、カーテンのすき間から漏れる明かりも少なくて。

夏祭りのときは、ぜんぜん雰囲気が違つ。ひとりで歩くのはとても心細かった。

とにかく明かりがほしくて、あたしはケータイを開いて、液晶の明かりで道を照らして歩いた。夜が更けすぎたのか、虫の鳴き声もほとんど聞こえなくて、穏やかな波の音が響いて逆に不気味だった。明かりなら、海にある。今晚もまた、イカ釣り漁船がでて、星

空と海の間を漁火が点々とともつていた。

でも、あの街は遠すぎる。あたしはあの街には行けない。

あの街はにせものだ。深い闇の海の上で、命をはりながら働く漁師たちの、命の輝きだ。

あの深い海の中に住む、魚や貝やたくさんの生き物と、その死骸が眠る深い深い世界の上で、ちっぽけな人間が懸命に生きている証の輝きだ。

「……？」

じつと海を見据えていたあたしは、ふと、漁火とは違う明かりを海面に見つけた。

屋台だった。

あの屋台が、また、ある。それも千由紀の家のすぐそばに。なのに千由紀は会話の最中、屋台についてなにひとつ触れようとしなかつた。

なにより、時間帯が違う。悠馬と行ったときは、まだ田付が変わつていなかつた。でも今は、そんな時刻もとうに過ぎていて、店を開けるような時間であるわけもない。客なんてはーるわけがない。

「……やっぱり、変だよ」

あたしが呟くと、ざつと風がふいた。

海から来る、冷たい風ではなかつた。人肌に近いような、生ぬるい風がまとわりつくように吹きつける。その風にまつとして、あたしはシャツから出る腕をぎゅっとぎゅっとしめた。

また、いる。

ここ最近、あたしは誰かにつけられていた。

それは決して、人ではない。気配でわかる。なにか黒い、影のようなものが、終始あたしのそばにいて離れようとしない。

誰かといふときは気にならない。けれどひとりになると、必ずあらわれる。

振り向くのが怖い。もしあの、外灯の下にいたらどうしようか。もし顔が見えたなら。目があつたら、どうしよう。

こわい。

「違う。だれも、いない」

あたしは自分に言い聞かせながら、走り出した。

屋台の光が、沖でぼんやりとともつてゐる。

あそこへ逃げるといつ手もある。でも、夜の海をひとつで渡る勇
気はない。

「違う、違う、違う」

ぶつぶつと呪文を唱えながら、あたしは家までの道を、ずっと走
り、逃げ続けた。

影はその後ろをついてきた。

電話がかかってきたのは、家族との買い物から帰つて、お風呂あがりにぼんやりとベッドでうたた寝していたころだった。

『 美和子さん、今、電話しても大丈夫ですか？』

「 彩ちゃん？」

電話の主は、悠馬の妹、彩ちゃんだった。

彩ちゃんとは、以前会つたときに連絡先を交換していた。それでいつもはメールのやりとりだけで、電話がかかってくるのはとてもめずらしい。

「 どうしたの？ なにかあった？」

『 お兄ちゃん、予定どおりに、先週美和子さんのところから大学に戻つたんですよね？』

「 悠馬？」

電話越しにも伝わる、重い雰囲気。それにはつとして、あたしは彼女の小さな声を聞き逃すまいと耳をそばだてた。

『 お兄ちゃん、昨日には帰つてくるはずだったのに、夜になつても今日になつても連絡ひとつないんです。ケータイにかけてもつながらなくて……それで美和子さんに聞いてみたんですけど』

「 悠馬は、たしかに大学に戻つたはずだけど……？」

『 連絡もなしに、帰りが遅くなるのはいつものことなんです。だから親もあまり心配してないんですけど、なんかわたし、心配で』

前に会つたときの彩ちゃんは、もつとはつらつとした話しかたをする子だった。けれど今は、消え入りそうな声で細々と話している。

その不安そうな声色がなんだか今の自分と似てこむるよつた涙がして、あたしは放つておけなかつた。

『……あの、美和子さん』

「なに?』

『お兄ちゃんど、おでん、食べたんですね?』

「うん、食べたよ?』

悠馬からメールがいったから、彩ちゃんも知つているんだ。そうだとわかつていても、屋台の話題が出てきたことに、あたしはなぜかまたあの吐き気が蘇りそうになつた。

「彩ちゃんに送つたの、たしかたまごの『メジやなかつた?』

『たまご……?』

「違うの?』

言じよどむ彩ちゃんに、あたしは自分の鼓動がはやくなつていいくのがわかる。どうか、自分が恐れていることになりませんよつ』。そう祈るのだけど、無情にも彼女の声には届かなかつた。

『送られてきたの、そんなんじやなかつたです……』

「どんなの、だつたの?』

『なんか、あまり、言いたくなくて……すいません』

このままでは、本当に彩ちゃんの声が消えてしまつ。そのかすれ声に、あたしはあわてて無理しないでと言つた。

「まだその『メ、残つてる? よかつたら、あとであたしのほうに送つてもらえないかな?』

『……いいんですか?』

「悠馬のことはわ、心配いらないよ。おとつに電話したとき、大学のほうでいろいろ用事できたよつな」と言つてたしね。そのうちひょつひょつ帰るかもしれないしだ」

『わつ……ですよね』

「うん。だから、彩ちゃんもあまり思いつめないで。メール送つてくれたら、その『メも消しちゃつていいからね。悠馬にはあたしからちゃんと言つておくから』

「

下手に話せば、自分も何を喋るかわからない。すこし乱暴だったけれど、あたしはそこで通話を切った。

電話を終えても、胸騒ぎがおさまらない。胸の鼓動は早くて、息もすこし乱れているけど自分で止められない。ぐつと唇を噛みしめて、あたしは半乾きの頭をふった。

彩ちゃんには嘘を言った。

これ以上心配させないほうがいいと思った。ほんとうは悠馬と電話もしていないし、連絡がとれていよいのはあたしも一緒だった。

悠馬が、行方不明。

最後に悠馬を見送ったのはお父さんだつたけど、バスに乗り込むところまで一緒にいなかつたらしい。ほとんど初対面のようなものなんだから、一緒にいても気をつかうだけだし。最後まで見送らなかつたお父さんを責めるつもりはない。むしろ行かなかつたあたしが悪い。

悠馬はバスに乗つた。
そう、思ひたかつた。

「……来た」

ややあつてから、約束どおり彩ちゃんからメールが届いた。件名も本文もなにもなくて、ただ、お願ひしていた写真だけが添付されていた。

悠馬と一緒に行つた夜の海。

あの夢幻のような空間が現実にあつたと、たしかに証明するこの

[写真]

「……」

あたしはそれを見て、こみあげてくるものをこらえるので精一杯だった。

親には友達に呼ばれたと嘘をついた。

あたしはサンダルをはくのももびかしく家を飛び出し、一目散にあの海沿いの道へと走り出していた。

ひとりになれば、あの影が必ず追つてくる。今晚もまた、あたしの後ろから気配がする。いつもはそれから逃げていたけれど、今は違う。心の中で、影がついてくるのを願っていた。

走れば、家から数分もかからずにある道にはいることができる。あいかわらず誰もいないで、虫の声と波の音だけがする、外灯の明かり今にも切れそうな薄暗く細い道だった。

あたしが帰つてから、地元の海はずつと穏やかだった。耳をすまえば、寄せでは返す波の音が静かに鼓膜を震わせてくる。磯の香りが強く鼻腔をくすぐつて、潮まじりの風が髪をしめらせた。

走るのをやめ、あたしは外灯の下で、荒い息をつきながらうづくまつた。

頭上では、蛾が何匹もはばたいている。あたしの肩にぶつかってくるのもいる。じじみのように地味で小さなものから、手のひらほどもあるペパーミントグリーンの蛾までが、消えかけの明かりの周りをぐるぐるぐるぐるとまわりつづけている。

海には今日も、漁火がともつていた。水平線の上に、街ができるいた。その先に陸があるのかと思うぐらい、にぎやかな街が、うずくまるあたしをじっと見つめているような気がした。

だいぶ呼吸が落ち着いてきても、あたしは顔をあげなかつた。食べたものを道端に吐瀉したときのように、じっと外灯の下でうずくまり、とも自分が無防備であるかのように見せかけた。

わあ、来い。

心の中で、そう呼びかける。あたしの後ろばかりをつけてくる、あの影に向かつて呼びかける。

いつも一定の距離を置いて、決して近づいてこようとしない影。あたしが逃げるときあわてて追いかけてきて、けれど立ち止まると怖気づいて動かなくなる、その黒い姿。

近づいてくるのを、あたしはじっと待つた。

磯の香りのまじつた生あたたかい風が、膝に顔をうずめるあたしの髪をさらつていいく。あれほどうるさかつたはずの虫の声が、遠ざかり、小さくなる。波の音だけは規則正しく、ざわめきのように砂をかいて静かに響いていた。

来い。

なかなか動かない影に、あたしは心の中で何度も念じる。はたして影はためらつているのか、それとも焦らしているのか。いつそ自分から動いてしまいたくなるけど、そうしたら影はきっと、逃げてしまふに違いない。

動きたくなる衝動をこらえるのに、あたしは自分の呼吸を数えた。ひとつ、ふたつ、みつと、数えてみてまだ自分の息が早いことに気づく。

疲れて早いわけじゃない。緊張して、呼吸が浅くなつてしまつている。

数をどんなに数えようと、影は動く気配を見せない。しゃがんだ足が、すこしづつしびればじめてくる。顔をうづめているから空氣も薄くなつてきて、それでもあたしは決して動かなかつた。

お願いだから、来て。

唇を噛みしめて、口の中にそれが伝つてきて。よつやくあたしは、自分が泣いていることに気がついた。頬を、涙がいくつもいくつも伝つてくる。泣いていることに気づいたら、肩がふるえて、嗚咽まで漏れた。

その涙がどうして流れたものなのか、自分でもよくわからない。こわいのかもしないし、悲しいのかもしない。こうしてうずくまつていると、波の音がどんどん近づいてくる気がして、自分が海のすぐそばにいるような錯覚に襲われる。いつかそのまま、飲み込まれてしまうのではと思つてしまふ。

夜の海が、こわい。

あたしの目から、またひとつ、涙があふれたとき。よつやく影が動いた。

「.....」

ひた、ひた、と。耳をすませばかすかにそんな足音が聞こえてくる。影はまだ、夜闇に隠れて姿を現さない。けれどあたしに近づいてくれば、この外灯の下にくれば、その姿が見えるかもしれない。

動き出したくなる衝動を、あたしは腕に爪を立ててまでこじりえる。足の感覚はもうなくなっていた。そして早かつた呼吸は、影が動き始めたときに、自ら止めた。

あとすこし。あと、すこし。見えなくても、心で感じる。影が近づいてくる。そして、うずくまるあたしを見下ろしている。微動だにしないあたしを心配して、そつと、手をのばしてくれる。

「……っ！」

あたしは顔をあげ、その手をしかと掴んだ。

おどろいて逃げようとする影が、渾身の力で引き寄せる。外灯の光を浴びてもその姿は黒い今まで、あたしは両手でその顔を包み込んだ。

「動かないで！」

狼狽して逃げようとする影が、あたしの一喝でおとなしくなる。背の高い影は、あたしに顔をまさぐられて、困ったように両手を胸の前でさ迷わせていた。

つつすらと無精ひげの生えたあごに、かわいてささくれた薄い唇。鼻梁の上に乗っているのは、きっと、眼鏡。

剛毛で、指に刺さる短い髪。厚い耳たぶ。たくましそうなじ。

確信して、あたしは影を抱きしめた。

「悠馬……」

影は、悠馬だった。

顔も服もわからないぐらい、すべて真っ黒になってしまっているけど。墨を全身にこぼしたわけではなく、身体の内側から影がにじみ出たようで、完全に色を失ってしまっているけれど。

指で触れればわかる。この姿かたちは、悠馬以外他ならない。

「気づかなくて、ごめんね」

抱きしめて、その身体から体温は伝わってこなかつた。冷たい

わけでもなく、むしろ生あたたかくはある。けれど、それはあたしと同じように、身体が発する熱ではない。どんなに強く抱きしめて、伝わってくる鼓動は弱々しいままだった。

影 悠馬が、おずおずと腕をまわしてくる。耳元に唇を寄せて、かかれているけれど、その口から声は出なかつた。

どうしてこうなつちやつたの？

もう訊こうとして、やめた。答えは自分の目で確かめたかつた。

「……行こう、悠馬」

身体を離して、あたしは悠馬の手をとつた。

お互いしつかりと手をつないで、あたしは悠馬を引っ張るよつて、道を外れて防波堤へと歩いた。

夏祭りの日と同じ、夜の砂浜におりる。

虫の声が聞こえない。生あたたかい風ばかりがふいている。磯の香りが強くて、けれど波はおだやかに寄せては返して岩の頭を撫でている。

海の向こうに浮かぶ、漁火の街。

その街から、ぽつりと離れたひとつつの灯り。

あの屋台に、あたしたちはもう一度、行かなればならなかつた。

どんなにつなぐ力をこめても、悠馬の指先からは温度を感じなかつた。

その肌ですら、あたしと違う。指をうずめると、そのままやぶれて突き抜けてしまいそうなぐらい、もうい。存在までもが不確かで、何度も振り返らないと、いつか消えてしまいそうでこわかつた。

あたしたちは再び、屋台への道を歩いていた。

陸にいたときはなんともなかつたのに。海を渡りだしたとたん、

あたりに霧が立ち込め始めた。

急に視界が悪くなつて、足元ですらおぼつかなくなる。あの田と同じよひこ、低い波の上を、田には見えない何かが道を作っている。海面の揺れが足に伝わり、まるで不安定な平均台の上を歩いているような気分だつた。

いなくなつていなかと悠馬を振り向くたびに、陸がどんどん離れていくのがわかる。やがて陸の明かりは濃霧にかき消されて、そしてあしたちが歩く道もまた、後ろから崩れ去つていくのが、踵に迫る波しぶきでわかつた。

もう、戻れない。

でも、あしたちは行かなければならぬ。

道の先に、ぼんやりと明かりがともつてゐる。霧に隠れて姿こそ曖昧だけど、暖簾のすき間から漏れる光はたしかにわかる。自分たちが屋台に近づいているとわかると、自然とつなぐ手にも力がこもつた。

夏祭りの日と回じなのに、回じよひこ手をつけないで歩いているのに。

いま、心の中にあるのは好奇心でも期待でもなくて、不安と恐怖ばかりで、なかなか足が前にすすんでくれなくて。

それでもお互いの手の感触だけを頼りに、前をすすんだ。もう、ふりむいても悠馬の影は霧に隠れてほとんどわからなかつた。

暗闇に霧がたちこめて、視界は前よりも、すこしだけ明るい。霧をかきわけ海を渡つて、ようやくたどりついた屋台はやっぱりなんの変哲もないおでん屋台だつた。

暖簾を手で広げて、中をのぞく。やっぱりお兄さんがいた。

白いタオルをバンダナがわりに、田深に巻いたお兄さんは、あとしと悠馬の影を見て、その大きな唇をにやりと歪めた。

「いらっしゃい」

まずははじめに、「おいが鼻をついた。

つんと刺すような刺激臭に、果物が熟れたような甘い香りも混じつている。けれどなによりも、ひどくすえた臭いが屋台の中にたちこめていた。

「今日は、なんにする？」

席につくのをためらうあたしたちなど知らぬ顔で、お兄さんは鍋の具をすすめてくる。鼻で息をするのをやめたあたしは、田を背けたくなるのこらえて中をのぞきこんだ。

「の前来たときは、おいしそうなおでんだったはずなのに。

いま、あたしたちの田の前にあるのは、決して食べ物といえるものではなかつた。

鍋からのほる湯気はない。ぐつぐつと煮えるあぶくもない。ただそこにあるのは、切り刻まれて、汁に浸された食材のみ。

大根だと思っていたのは輪切りの手首足首で。

しらたきだと思っていたのは束ねられた頭髪で。
はんぺんだと思っていたのはどこかもわからない肉片で。
巾着だと思っていたのは内蔵の一部分で。

かまぼこは耳で。

牛すじは指先で。

こんにゃくは、舌で。

ちくわは。

「うう

腐敗し、悪臭を放つ男性器に、あたしはたえられず口を覆つた。
彩ちゃんから送られてきたたまごの写真は、まぎれもなく、腐りかけた人間の眼球だつた。

「ミワコ、どうかしたか？」

お兄さんに話しかけられたけど、それどころではない。あたしはその場に嘔吐してしまいそうになるのをこらえるのに必死で、悠馬とつないだ手も離して両手で顔を覆つた。

「具合が悪いのか？なんか飲むか？」

親切で渡してくれたコップ。けれどその中にあるのは決して水ではなく。どす黒く変色して、腐敗した何かがまだらに浮かぶ、血液だった。

「……だめだ」

咳き、あたしは悠馬を引きずり暖簾を出た。

今にも吐いてしまいそうになるのを懸命にこらえて、あたしは悠馬の頭を乱暴につかんで引き寄せる。そのまま海面に手をつかせて、口の中に無理やり指をねじ込んだ。

あたしは、あのあと全部吐いた。だからもう身体にはほとんど残っていない。

けれど悠馬は食べて、そのまま身体に残った。だからきっと、こうなつてしまつたんだ。

抵抗しようともがく舌をおしのけ、口内をまさぐり喉を探す。そして指をあつたけ奥におしゃって、悠馬の身体がふるえるのを待つた。

「　っー」

彼の吐き出すものまでもが、真っ黒な影に変わってしまっていた。げえげえと吐く声ですら聞こえなくて、ただ淡々と、悠馬の口から液体が吐き出されていた。

あたしたちが食べたのは、死んだ人間の身体だった。

腐敗して、死の影を強くまとった、人であつたはずの肉片だった。

「……コウマ、ミワコ、大丈夫か？」

お兄さんの声が聞こえる。でも、あたしたちはこたえる余裕がなかつた。

海の道は消えてしまつている。屋台のこのわずかなスペースだけが、あたしたちの立つていられる場所。このままここに残つていても、きっと潮の流れに乗つて沖まで流されてしまうに違いない。

「聞いてるか？」

暖簾ごしに話していたはずの声が、急に近くなつた。

お兄さんがこちらに来たわけではない。暖簾が消えたのだった。

嘔吐を続ける悠馬の背をわすりながら振り向けば、屋台の姿は跡形なく消えていた。

屋台の向こうにいるはずだったお兄さんは、ただその場に立ち尽くして。鍋は消え、切り刻まれた肉片がぐしゃりと嫌な音を立てて足元に落ちる。海の底に沈むわけではなく、あたしたちと同様、その遺体も海の上に浮いていた。

食べるためには切られたものはほんの一端だつたようで、まだ人の姿の残るものが多くあつた。ぞつと寒氣がしたのは左腕と思われるもので、ところどころ骨がむき出しになり、皮膚は変色して黒く縮み、えもいわれぬ液体がその切り口から流れ出していた。

大きな肉の塊から、長い繩のようなものが出ている。それが一体何なのかを考えたくなくて、あたしは血がにじむほど唇を噛んだ。

「……どうして、ですか？」

「なにがだい？」ミワコ」

水面に膝をつくあたしたちを、お兄さんがあざ笑うかのように見下ろしてくる。あいかわらず、目が見えない。だから、くわしい表情がわからない。

「なんで、こんなこと……」

どうしてあたしたちが、人の亡骸を食べなければならないのか。目の前にいる、この男性が、かつて生きていた証をなぜ口にしなければならないのか。

「蘇るためだよ」

彼の口から出た言葉は、ぞつとするほど冷たかった。

「生きた人間に、死んだ自分の身体を食べさせたら。そうしたら、おれは蘇れるんだ」

彼はきっと、千由紀が話していた、この海で行方不明になつた乗組員に違ひない。地元の人ではなく、仕事のためにやつてきたほかの地域の人だ。

「生きた人間が、死んだ人間の肉を食つとな。肉がそいつの『生』を吸いとつてこっちに運んでくれるんだ。だから見てみろ、ユウマはもう、ほとんど生きちゃいない」

嘔吐と空咳を繰り返す悠馬を見て、彼は笑つた。

「ミワコはダメだったみたいだけど、そいつは簡単だつた。夜明け

のバスに乗るときに、ちょっと沖から声をかけてみたんだ。そうしたらまたのことやりてきて、ひとりでうまいいうまいったらふく食つていったさ」

やつぱり。悠馬はバスに乘らずに、この町に残つたんだ。この屋台に来て、たくさん、お兄さんの身体を食べたんだ。

「そのうち自分が影になつて、ようやく気づいたころにやあもう遅かつた。身体もなくなつて、声も失つて、困つてミワコのやばに行つて、でもどうしていいかわからなくて後をつけることしかできなかつた。……違うか、ミワコまで屋台に行かないよつ見張つてたのか？」

訊かれても、悠馬はこたえられない。悠馬が失つた生も、声も、すべてでは彼に奪われてしまつたのだから。

「コウマがたらふく食つてくれたおかげでな。おれの身体もあと少しで戻れるようになる。お前らがあとひとくちふたくち食つてくれりやあ、お前らの命と引き換えに、おれが陸に戻れるのさ」

低い笑い声をもらして、彼はおもむろに足元の腕を拾い上げた。

「 まあ、食え」

腐敗して関節までもが変色して、今にももげ落ちてしまいそうな腕を、彼はあたしの口元につきだしてくる。たしかにその顔色は、前に会つたときよりも数段よくなつていて。それは悠馬の生を吸つたからに違いない。

「食え。そしてお前たちが海に消えればいい」

唇に触れそになる指先。もう、何本かの指はなくなつてしまつている。指が落ちてむき出しになつた関節の上を、ミミズのような岩虫が這つている。

これが、海に沈んだ人の姿。

「 ぜつたい、嫌！」

あたしはその腕を力いっぱいはねのけた。

手に、力ない肉の感触が残る。硬くはない。死後硬直も終えて、弛緩してしまつた身体。海水を吸い、ぶよぶよにふやけてしまつた

身体。体温もすべて失い、ただ、冷たくなってしまった身体の一部分の、肉片。

それは彼の手から抜けて、海へと落ちていった。ぼちちゃんと鈍い音がして、あつというまに深みに沈んでいった。

あの腕はもう、海の上には戻らない。また海の底に転がって、魚や貝たちの餌になっていく。残った骨もいすれは砕け、砂となり、海の一部になっていく。

「お前……！」

激昂した男性が、あたしを強く睨みつける。負けじとあたしも睨み返した。

どうしよう。どうしたらい。

見えない瞳を睨み続けながら、あたしは考える。逃げなければ、と、それだけはわかつていた。

でも、どうやつたら悠馬がもとに戻れるのかわからない。
きっと彼は教えてくれやしない。今ここで逃げたとしても、解決法がわからなければ悠馬はもとに戻らない。一生影のまま、あたしのそばにいる運命だけには、絶対にさせちやいけない。

「もう、逃げられない。あきらめ」

「ぜつたい、嫌」

悠馬は死んだ身體を食べて、彼に自分の生を吸い取られてしまった。もうこの影の身體には、ほとんど生が残っていないのだ。

「逃げても、ユウマはもとに戻らないぞ」

「ぜつたい、もとに戻すもの」

「じゃあ悠馬も、生を吸収すればいいんだ。

氣づいた瞬間、あたしは迷いなく、自分の右手に歯をたてた。

「！ お前」

彼の焦る声が聞こえる。でもそんなの気にしない。ためらってはいけないと想い、あたしは手の甲の弾力ある皮膚を、力いっぱい噛みちぎった。

口の中に残った肉はすぐに吐き出した。歯形どおりにえぐれた手

の甲からはすぐに血があふれ出し、あたしはこぼれ落ちる前に傷口を悠馬の口元につきつける。事態を飲み込めていない悠馬の脣を無理やり開いて、問答無用であたしの血を流し込んだ。

「悠馬、飲んで！」

吐き出そうとするのを、怒鳴ってやめさせる。次から次へとあふれる血潮のすべてを悠馬の口に流し込み、あたしは吐き出させないよつあいをつかんで上向かせる。

「やめる……！」

彼が、阻止しようと動くのは遅く。悠馬の喉仏が、『ぐりとあたしの血を嚥下した。

あたしは今、生きている。この血にはあたしの『生』が宿つている。悠馬の身体だつてまだ完全に死んだわけじゃないから、なにかきつかけさえあれば、化学反応のように生を取り戻してくれるに違いない。

崩れ落ちる悠馬の身体を抱きとめ。不思議と痛みを感じない右手を、あたしは左手で包み込む。そしてもう一度、彼を見上げた。

「あたしたちは、あなたの身代わりにはならない！」

「……お前ら！」

彼が怒りの雄叫びを上げた瞬間、足元の海が崩れた。
あたしたちは、海に落ちた。

氣を失ったのか、力のない悠馬の身体を抱き、あたしは海から顔を出した。

「っは！」

口の中に残る海水を吐き出し、新しい息を吸おうにも身体がすぐに沈んでしまいそうになる。悠馬の顔まであげさせる余裕なんてなかつた。自分の息をつぐのですらむずかしくて、あたしは沈みそうになる身体でもがいて懸命に浮上させた。

屋台も、男性も、消えてしまっていた。深い霧のたちこめる海のど真ん中で、あたしは自分がどこに向かって泳げばいいのかまったくわからなかつた。

陸に行かなければ。

でも、陸がどっちかわからない。

下手に泳いで、もし沖へと行つてしまつたら。戻つてくるぶんだけ体力を消耗して、陸まで泳げなくなつてしまつ。

陸はどっち。

陸の明かりが見えない。

このままでは、あたしたちは溺れ死んでしまう。

「誰か……！」

くるはずもない助けを求めるあたしの頭上を、冷たい風が吹いた。

「だれか……！」

生ぬるくは、ない。冷たい、海の潮風。それがあたしの濡れた髪を撫で、そして霧をさらっていく。

星空が見えた。視界が晴れた。

「ああ……！」

あたしはこれほど、あの灯かりに感謝したことがなかつた。

霧が晴れたおかげで、沖の漁火が見えはじめる。点々と灯る、白や橙の熱く燃えるような輝き。海で汗を流す、漁師たちの命の灯が、今またあたしの目の前に蘇つてくる。

あの街は、にせものだ。

にせものの街に背を向けて泳げば、ほんものの街に戻ることができるに違ひない。

あたしは悠馬の身体を抱えなおし、力をふりしぼつて波をかいた。

海とプールでは、泳ぎ方がまったくもつて違つてくれる。

プールは足がつく。でも海はつかない。

プールには波がない。でも海はある。

足がつかないところを泳ぎ続けるのは、とても体力を消耗する。

足はずっと水を蹴り続けて、手は波をかきわけ続ける。

泳ぐのをやめてはいけない。やめたら身体が沈んでしまう。

陸から見える波が低くても、いざ海面におりれば波はとても高い。白波が立たずとも、そのわずかな山ですらあたしたちの身体を飲み込もうと容赦なく襲つてくる。

何度もあきらめそうになつたかわからない。けれどあたしは、泳ぎ続けていた。

決して早くはない。すすんでいるのかですら自分にもわからない。

けれど身体は懸命に海を泳ぎ、陸に戻ろうと動いていた。

陸に戻るんだ。

戻つて、生きるんだ。

頭の中で、そればかり繰り返す。陸が見えないと、苦しいとか、疲れたとか。そう思つたらもう泳げなくなるのがわかつていた。身体はもう限界。気力だけで動いていよいよなものだった。

あたしは今、生きている。

生きているから、身体が動く。生きているから、息ができる。

生きているからこそ、苦しくて。疲れて。力尽きそうになつて。けれど心臓は、しっかりと鼓動を刻み血潮を身体中でめぐらせていく。

く。

大丈夫。あたしはまだ、やれる。

そう心で叫んで、水を蹴つた足首を、何者かに掴まれ渾身の力で

引っ張られた。

「いやっ！」

そのまま、海に引きずり込まれそうになる。抵抗もむなしく、あたしの顔は海に沈んだ。

悠馬だけは離しちゃいけない。だから、手の力だけはけつして緩めない。けれど疲れきった身体は、引きずり込もうとする力から逃げることができなかつた。

消えたはずの彼が、あたしの足を引っ張つていた。

『行かせない！』

声にならない声が、海の中、あたしの頭に伝わつてくる。低く、かすれた声が、直接脳髄に響いてくる。

『行かせやしない！』

彼のその姿は、すっかり変わり果てたものになつてしまつていた。海に消え、海に侵食されそくなつてている身体。腐敗し、朽ちかけた手足。頭のタオルはなくなり、両の眼は眼窩がむきだしになつてゐる。頭髪もほとんど残つておらず、頭皮もはがれ、頭蓋骨が見えて穴まであいていた。

『おれひとりを、残していくなんて！』

開いた口の中は、歯が何本かなくなつてゐる。片方の八重歯は抜け落ちていた。舌はもうなく、上顎にフジツボがはりついていた。

『離して！』

そうあたしが叫んでも、その声は海中に響かない。ただいたずらに肺の中の空気を無駄にするだけで、意識が遠のきやうになるのを早めるだけだつた。

仄暗い海の底に、ひきずりこまれていくあたしの身体。あたしだけではない、悠馬も一緒だ。彼の身体はいぜん影のままで、息をしているのか心臓が動いているのか、抱きかかえていてもさつぱりわからなかつた。

「助けて……」

最後の悪あがきに見上げた海面は、月明かりに照らされて残酷に

もきらきらと輝いて見える。あとすこし頑張って水をかけて、引きずり込むとする手を振りほどいて、もがきにもがけば手にはいる世界がすぐそばにあるはずなのに。

人は、海の中では生きていけない。

魚や貝たちとは違う。空気がなければ生きていけない。踏みしめる大地がなれば生きていけない。

深い深い海の底では、けつして、生きていけない。

『行かないで！』

彼の声は、いつしか懇願に変わっていた。

この深い海の底で、横たわらなければならない、生を失った身体。一度と陸には戻れず、海の一部になるしかない、朽ち果ててゆく身体。

肉片がいかにほかの生き物の血肉に変わろうとも。骨だけは、残される。

そしてそれが砕け、砂となり、広大な海の中に溶け込むしかない、さだめ。

『ひとりにしないで！』

その悲痛な叫びに、あたしはただ、うめくしかできなかつた。

彼と一緒に、海に沈むのは嫌だ。

けれどもう、陸に戻る力は残つていない。

最後の息が、尽きそうになる。目に浮かんだ涙は、海に溶けて消えてしまつた。

自分の身体も、この涙のように、なくなつてしまふんだ。そう思うと、悔しくてまた涙があふれた。そして、まぶたの力が抜けはじめる。

「 美和子！」

閉ざされようとしていたまぶたの動きが、その声に、止まつた。腕の中にいたはずの悠馬が、動いていた。彼はその力強い腕で、沈みゆこうとしているあたしの身体をしつかりと抱きかかえた。あれほどあたしが求めてやまなかつた力が、彼にはまだ残つてい

た。ひとつふたつと水をかいて、浮上した悠馬はあたしの顔を海から引き上げてくれた。

「 っ、う」

大量に海水を飲んでいて、うまく息を吸うことができない。うめくあたしが海に沈まないよう支え続けながら、悠馬は泳ぎだした。「泳ぐんだ、美和子。手でかけて。足で蹴つて。できるところまで一緒に泳ごう」

呼吸が落ち着かなくて、意識も朦朧としたまま。それでもあたしは、悠馬の声に導かれるまま身体を動かした。

悠馬の姿がどうなったのか。気にする余裕なんてなかつた。ただ、声が戻つたことには気づいた。噛みちぎつた自分の手がどうなつたかなんて、どうでもよかつた。

「ありがとう、美和子」

その声に、涙が出た。

悠馬に支えられながら、あたしは海を泳いだ。手で波をかいた。足で水を蹴つた。

大丈夫。

自分はまだ、生きている。

最後のほうはほつこにあたしも力尽きて、悠馬ひとりで泳いだようなものだった。

それでもどうにか陸が見え、足がつくようになったときは、本当に嬉しかつた。

お互に支えあつよつに肩を組んで、ずるずると重い身体を引きずり。ようやく波の届かない浜辺までたどり着いたとき、糸が切れたように一人で倒れこんだ。

大量の海水を飲んで、喉が焼け付くように熱かつた。肺にも大量の水が流れ込んでいて、げほげほと咳き込みながら吐き出している

と、悠馬がそつと背中をさすってくれた。彼のほうこそ長い間海中にいたはずなのに、なぜかほとんど水を飲まなかつたようだつた。

「大丈夫か？ 美和子」

「……うん」

気遣う声にも、曖昧にしか返せない。ただただ疲れ切つて、あたしはこのまま氣を失つてしまいそうだつた。

「ゆうま……」

「うん？」

「生きてる？」

「……生きてるよ」

眼鏡こそなくなつてしまつたけれど。田の前にいる悠馬は、たしかに、生きている悠馬だつた。

「ありがとう、美和子」

「うん……」

頭を撫でてくれる手は、ちゃんとあたたかい。肌もある。今にも消えたりしない。ちゃんと、ここにいる。

あたしも、悠馬も、ちゃんと生きている。

「よかつた……」

抱きしめてくれる悠馬の胸に身体を寄せよつとして、あたしはふと、思い出した。

足首に残る感触。それがまだ、消えていない。

悠馬もそれを思い出したようで、はつと二人で顔を見合わせる。お互ひひとりで確認する勇気がなくて、目で合図をして一緒に見た。足首を掴んだ手。それは名残ではない。まだたしかに残つていて。身体を起こし、見た先にいたのは、

彼、だつた。

「……よかつた」

あたしの口を最初についた言葉は、それだつた。

海の中で見た姿のまま。あたしたちが食べたはずのところも、ちゃんとともとに戻っている。もちろん失ったところのほうが多いけれど、それでも彼の身体は陸に戻ってきた。

ふと気がついて、自分の手を見てみると。噛みちぎったはずの手の甲は、なに」ともなかつたかのように綺麗なままだつた。

あたしがそつと足を動かすと、彼の手はすぐに離れた。その残された指先は、もう一度と、動くことがなかつた。

「……とりあえず」

「警察、呼ばなきや」

「救急車も」

「お母さんに、電話……」

「ケータイ、水没してる……」

はつきりしない頭のまま、ふたりでのろのろと動き出す。指一本動かすだけでも大変で、なんとか上半身を起こしたといひでふと氣づいた。

「……空が」

満天の星が瞬いていたはずの空が、白み始めていた。

海を見れば、漁火の街はもう消えていた。

そして水平線の向こうから、かすかに、輝きが見え始めていた。

「朝日だ……」

呆然と、悠馬が呟く。

その太陽の光は、漁火がかすんでしまつほど強い、すべての命の光だった。

まず、親にこいつひどく叱られた。

今年で二十歳にもなろうといつのに、怒られるあたしたちはやっぱり子供だった。病院のベッドの上で、懇々と説教されて看護師さんたちにくすぐすと笑われた。

なぜ大学に戻ったはずの悠馬まで一緒にいるのか。それを話し出すとややこしくなるので黙っていたけれど、両親ともなにも言わなかつたので内心ほつとした。

とりあえず。あたしたちは海で遊んで溺れたということにした。そしてどうにか泳いで陸に戻ったとき、偶然、打ち揚げられた遺体を見つけたのだということにした。

彼、は、やはり千由紀の話していた行方不明の船員だったようで、身元もすぐに判明して遺族のもとへと戻つていった。

沖で消えたはずなのに、潮の流れに乗つて浜辺に打ち上げられた男性の遺体。よほど陸に戻りたかったのだろうと、噂する漁師の人たちが話していた。

結局あたしたちは、彼の名前も素顔も知らぬままだつたけど、知らないほうがいいだろつと思つ心が密かにあった。

「 悠馬、準備いい？」

両親の説教のおかげで、里帰りの最後の数日は、家にじこめら

れていった。

海で溺れたという件もあり、すこし身体を休めなさいと言われ、悠馬も家に滞在した。彼は実家には帰れなかつたけれど、ちゃんと連絡をいれさせた。ケータイが修理から戻つたら、ちゃんと彩ちゃんにもメールをいれて、あの写真を忘れるぐらい可愛い画像をたくさん添付してあげようと思つ。

あたしたちが溺れた話を千由紀も聞いたのか、連絡が来たけれど、彼女も仕事があつたので会えなかつた。仕事が終わつてからの時間は、千由紀も彼氏に会う貴重な時間にまわしていたし、そろそろべきだと思った。

「もうすぐ、出発するよ?」

大学まで送ると言う両親を丁重に断つて、あたしたちは一緒にバスで帰ることにした。

「忘れ物はないか?」

「身体に気をつけなさいよ」

あれこれ言い足りないようで、両親が窓の外から次から次へと言葉を投げてくる。それにひとつひとつ返事をしているうちに、出発時刻になり、扉を閉めたバスがゆっくりと動き始めた。

荷物は通路の向かい側に置いて、あたしは悠馬と一緒に座り、窓からばいばいと手をふつた。お父さんもお母さんも、寂しそうな悲しそうな心配そうな複雑な表情を浮かべながら手をふり返してくれた。

バスは海沿いの国道を走る。早朝の便に乗つて、行きはその中で寝ていくつもりだった。

けれど悠馬は窓際で、また食い入るように海を見つめていた。
今朝は綺麗な朝焼けだった。

「……悠馬、きれい?」

「うん、綺麗」

海を見つめるその視線に、あたしはもう、不安を抱かなくなつた。
悠馬は、海を知つた。

やわしい海と、こわい海を知った。
明るい海と、暗い海を知つた。
海の中にある、生と、死を知つた。

あたしたちは陸の上で、今日も大地を踏みしめ、生きてゆく。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8404k/>

漁火屋台

2011年1月23日17時41分発行